

大木 囲貝塚

－災害復旧に伴う東貝層発掘調査報告書－

平成25年(2013年)7月

宮城県七ヶ浜町教育委員会

大木田貝塚

－災害復旧に伴う東貝層発掘調査報告書－



A地点貝層断面（北から）



A地点 1号人骨（南東から）



A地点付近（昭和49年撮影）



CF42・CH42地点調査風景（昭和49年撮影）



CF42地点調査風景（昭和49年撮影）



CF42地点遺物出土状況（昭和49年撮影）

序 文

七ヶ浜町の文化財保護行政に対しましては、日ごろから多大なるご理解とご協力をいただき感謝申し上げます。

松島湾に臨む七ヶ浜町は、13.27km²と小さい町ですが、国史跡大木団貝塚をはじめ、49ヶ所もの遺跡が分布しており、何千年前から人々が営々と暮らしてきた生活の痕跡をいたるところで見つけることができる、住みやすく、文化の薫り高い町です。

当町は、平成23年3月11日の東日本大震災により甚大な被害を受け、平成24年3月に七ヶ浜町震災復興計画を策定し、復旧⇒再生⇒発展と着実に一歩ずつ前進していますが、各種開発工事等により、埋蔵文化財は破壊、消滅の危機さらされています。当教育委員会としましては、先人が残した貴重な文化財を守り伝え、教育普及に努めているところであります。文化財保護を通して、より豊かな文化の創造に努めることが、復興に立ち上がるわれわれ町民一人ひとりにとって非常に大切であり、心の支えになることと考えております。

本書は、平成23年9月の台風により崩落した国史跡大木団貝塚の法面復旧に先立って、平成24年度に実施した発掘調査の報告書です。国史跡大木団貝塚は「大木式土器」の標式遺跡として考古学史上、非常に有名な遺跡であると同時に高い評価を得ているものです。縄文時代前期から中期の東北中・南部を中心とした広範囲の土器編年の標式となっています。

過去に数度の調査が行われ、多大な成果を得ていますが、今回の調査により土器や骨角器などの道具類、縄文時代の人骨など様々な遺構、遺物が見つかり、遺跡の性格がさらに明らかになる貴重な資料が得られました。

最後に遺跡の保護に理解を示され、発掘調査に際して多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際の調査にあたられた皆様に対して、厚く御礼申し上げます。

平成25年7月

七ヶ浜町教育委員会
教育長 武田光彦

例　　言

1. 本書は、宮城県宮城郡七ヶ浜町東宮浜字東大木9地内に所在する史跡大木団貝塚の発掘調査報告書である。
2. 本貝塚の発掘調査は、平成23年9月の台風15号による土砂崩れの災害復旧に伴う事前調査として行ったものであり、発掘調査から整理作業及び本書の作成に至る一連の業務は、文化庁による国宝重要文化財等保存整備費補助金(町内遺跡発掘調査等事業)を活用し、平成24年度に実施したものである。
3. 本貝塚の発掘調査と整理作業は七ヶ浜町教育委員会が主体となり、生涯学習課文化財係が担当した。職員の体制は下記のとおりである。

教　育　長 中津川 伸二(平成24年4月～9月)　　武田 光彦(平成24年10月～)

生涯学習課長 鈴木 俊博

課　長　補 佐 加納 貴美子(平成24年4月～平成25年3月)

文化財係長 鈴木 喜雄　主　查 田村 正樹

非常勤職員 川村 正・佐々木 広美・虎井 優子

発掘調査作業員 佐々木 広美・虎井 優子・廣野 徳・矢竹 真由美・矢本 聰子

佐藤 光智・佐藤 要市・櫻井 良博・舟山 武・吉田 麻美

室内整理作業員 川村 正・佐々木 広美・虎井 優子・廣野 徳・矢竹 真由美

矢本 聰子・佐藤 光智・佐藤 要市・櫻井 良博・舟山 武

吉田 麻美・志田 佳貴

4. 本貝塚の発掘調査および資料整理と本書の作成に際し、以下の諸機関・諸氏よりご指導・ご助言ならびにご協力を賜った。ここに記して、心より謝意を表します。

相原淳一・石川俊英・大坂拓・小原一成・高妻洋成・佐久間光平・菅野智則・菅原弘樹

須田良平・高橋守克・中尾真梨子・古田和誠・早瀬亮介・堀江格・山田晃弘

宮城県教育庁文化財保護課

5. 本発掘調査における現場写真撮影に使用した機材等は以下のとおりである。

カメラ:Nikon D90・Canon EOS KissX3/レンズ:AF-S NIKKOR 18-105mm・EFS 18-55mm

6. 遺物の写真撮影は、田村正樹が担当した。撮影に使用した機材等は以下のとおりである。

カメラ:Nikon D90/レンズ:AF-S NIKKOR 18-105mm

7. 本書に掲載した遺構実測図等のトレース、画像処理等には下記のソフトウェアを使用した。

Adobe Illustrator CS4/Adobe Photoshop Element8

8. 本書に掲載した遺構実測図のトレース、遺物実測図の作成およびトレース、遺物拓本、遺物写真撮影、図版レイアウトなどは田村正樹が中心となり、室内整理作業員がこれを助けた。

9. 本書の執筆は、田村正樹が執筆・編集し、校正・照合を佐々木広美・虎井優子・矢竹真由美が担当した。

10. 本発掘調査の成果については、下記においてその概要を公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合には、本書がこれらに優先する。

大木團貝塚 発掘調査現地公開(平成24年11月9日、10日、18日)

平成24年度 宮城県遺跡調査成果発表会(口頭・紙上発表)

「大木團貝塚東貝層」(平成24年12月9日 会場:東北歴史博物館講堂 主催:宮城県考古学会)

11. 本発掘調査で出土した遺物及び図面・写真等の記録資料については、七ヶ浜町教育委員会が管理し、七ヶ浜町歴史資料館で一括保管している。

凡 例

1. 本発掘調査における測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標X系による。調査区の測量原点は以下のとおりである。なお、方位は座標北を表している。

【T-1】 X=-188211.368	Y=18465.916	Z=35.789
【T-2】 X=-188278.591	Y=18499.254	Z=34.635
【A-1】 X=-188285.434	Y=18527.370	Z=34.337
【B-1】 X=-188168.427	Y=18476.358	Z=35.768
【B-2】 X=-188145.423	Y=18506.477	Z=21.170
2. 第1図は、七ヶ浜町都市計画図を複製・加工して使用した。
3. 本書で使用した土色の記述については、「新版標準土色帖」(小山・竹原2011)を使用し、肉眼により観察を行ったものである。
4. 遺構・遺物実測図の縮尺は下記の通りで、それぞれ図中にスケール、縮尺を付して示した。
調査区配置図:1/1000、遺構配置図:1/60・1/100、遺構断面図:1/30・1/60、土壙墓:1/20
土器・土製品類:1/2・1/3、石器・石製品類:1/2、骨角器:1/1、1/2
5. 遺物写真の縮尺は、土器の立面・俯瞰、石器、石製品、骨角製品の俯瞰すべて任意である。
6. 各調査区の層序は算用数字で表記し、適宜分層の必要がある際は、算用数字とアルファベット小文字の組み合わせで表記した。また、遺構配置図・断面図では下記の略号を使用して記載した。
流:流出土、攪:攪乱、B:粘土ブロック、W:樹木・樹根、P:土器、S:礫、炭:炭化物
7. 遺物観察表内の法量について、残存部分の計測値は()付き、欠損などにより計測できなかつたものは「-」を付した。また、数量については、基本的に長さは「cm単位」、重さは「g 単位」である。
8. 引用文献及び本書執筆にあたり参考とした文献については、巻末に一括して掲載した。

調 査 要 項

遺跡名: 大木囲貝塚 (宮城県遺跡地名表登載番号: 20006)
所在地: 宮城県宮城郡七ヶ浜町東宮浜字東大木・西大木・南下方・北下方地内
調査原因: 台風15号による災害復旧に伴う事前調査
調査期間: 平成24(2012)年6月5日～平成24年12月22日
調査面積: A地点 約20m² B地点 約16.2m²
調査主体: 七ヶ浜町教育委員会 教育長 中津川伸二(平成24年4～9月) 武田光彦(平成24年10月～)
調査担当: 七ヶ浜町教育委員会 生涯学習課文化財係
調査員: 田村正樹(生涯学習課文化財係)
作業員: 虎井 優子・佐々木 広美・廣野 徳・矢竹 真由美・矢本 聰子・佐藤 光智
佐藤 要市・櫻井 良博・舟山 武・吉田 麻美
調査指導: 宮城県教育庁文化財保護課

目 次

序 文 例 言 凡 例 調査要項 目 次

第1章 遺跡の概要と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境	1
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境	2

第2章 調査に至る経緯

10

第3章 調査の経過と方法

10

第4章 発掘調査の成果

12

第1節 A地点の遺構	12
------------------	----

1 貝層(A-8貝層)・遺物包含層	12
2 遺構	12

第2節 B地点の遺構	26
------------------	----

1 貝層(A-12b貝層)・遺物包含層	26
2 遺構	26

第3節 出土遺物	28
----------------	----

A-1. A地点出土土器	28
--------------------	----

(1) 第1トレンチ3層出土土器	28
(2) 第2トレンチ3層出土土器	28
(3) 第3トレンチ3層出土土器	28
(4) 南西壁3層出土土器	34
(5) 第1トレンチ14層出土土器	34
(6) 第3トレンチ12・13・14層出土土器	34
(7) 表採土器	34
(8) 遺構外出土土器	35

A-2. B地点出土土器	62
--------------------	----

(1) 第1トレンチ出土土器	62
(2) 第2トレンチ出土土器	63
(3) 第3トレンチ出土土器	63
(4) 表採土器	63

B. 土製品	72
--------------	----

C. 石器・石製品	73
-----------------	----

(1) 剥片石器	73
(2) 磚石器	74

(3) 石製品	74
D. 骨角製品	76
 第4節 自然遺物	78
 第5章 自然科学分析	84
第1節 大木園貝塚A地点貝層出土炭化物における放射性炭素年代測定(AMS測定)	84
第2節 大木園貝塚A地点出土人骨放射性炭素年代測定(AMS測定)	87
 第6章 考察	97
第1節 遺物の特徴と編年的位置づけ	97
1 繩文土器	97
2 石器	99
3 骨角製品	100
第2節 貝層の特徴と遺跡の性格	100
 第7章 総括	101
 引用・参考文献	103

写真図版

遺構図版……写真図版1～7　　遺物図版……写真図版8～15

報告書抄録

挿図目次

第1図	七ヶ浜町と大木園貝塚の位置	1
第2図	大木園貝塚調査区配置図	3・4
第3図	大木園貝塚と周辺の遺跡	8
第4図	A地点遺構配置図	13・14
第5図	A地点第1トレンチ断面図	15・16
第6図	A地点第2トレンチ・拡張部断面図	17・18
第7図	A地点第3トレンチ・南西壁断面図	19・20
第8図	A地点ST01平面図	23
第9図	A地点ST01出土土器	23
第10図	A地点Pit2・Pit5出土土器	25
第11図	B地点 SK01出土土器	26
第12図	B地点 SK02出土土器	27
第13図	B地点遺構配置図	29・30
第14図	B地点第1・2トレンチ断面図	31
第15図	B地点第3トレンチ・SK01・SK02断面図	32
第16図	A地点第1トレンチ3層出土土器(1)	36
第17図	A地点第1トレンチ3層出土土器(2)	37
第18図	A地点第1トレンチ3層出土土器(3)	38
第19図	A地点第2トレンチ3層出土土器(1)	40
第20図	A地点第2トレンチ3層出土土器(2)	41
第21図	A地点第3トレンチ3層出土土器(1)	43
第22図	A地点第3トレンチ3層出土土器(2)	44
第23図	A地点南西壁出土土器	45
第24図	A地点第1トレンチ14層出土土器(1)	46
第25図	A地点第1トレンチ14層出土土器(2)	47
第26図	A地点第3トレンチ12・13・14層出土土器	48
第27図	A地点1層出土土器(1)	49
第28図	A地点1層出土土器(2)・2層出土土器	50
第29図	A地点第2トレンチ7・8層出土土器	52
第30図	A地点表採土器(1)	53
第31図	A地点表採土器(2)	54
第32図	A地点表採土器(3)	56
第33図	A地点表採土器(4)	57
第34図	A地点表採土器(5)	58
第35図	A地点表採土器(6)	59
第36図	A地点表採土器(7)	60
第37図	A地点表採土器(8)	61
第38図	A地点遺構外出土土器	62

第39図	B地点第1トレンチ出土土器(1)	64
第40図	B地点第1トレンチ出土土器(2)	65
第41図	B地点第1トレンチ出土土器(3)	66
第42図	B地点第2トレンチ出土土器	68
第43図	B地点第3トレンチ出土土器(1)	69
第44図	B地点第3トレンチ出土土器(2)	70
第45図	B地点表採土器(1)	71
第46図	B地点表採土器(2)	72
第47図	A・B地点出土土製品	73
第48図	A・B地点出土石器(1)	75
第49図	A・B地点出土石器(2)	76
第50図	A・B地点出土骨角製品	77
第51図	[参考]暦年較正年代グラフ	86
第52図	[参考]暦年較正年代グラフ	90
第53図	西貝層CS77地点出土鹿角製櫛	100

表目次

第1表	大木園貝塚の主な調査・研究の歴史	5
第2表	大木園貝塚と周辺の遺跡	9
第3表	A地点第1トレンチ土層観察表	21
第4表	A地点第2トレンチ土層観察表	21
第5表	A地点第3トレンチ土層観察表	22
第6表	A地点南西壁土層観察表	22
第7表	B地点第1トレンチ土層観察表	33
第8表	B地点第2トレンチ土層観察表	33
第9表	B地点第3トレンチ土層観察表	33
第10表	B地点 SK01土層観察表	33
第11表	B地点 SK02土層観察表	33
第12表	A地点出土動物遺存体集計表(1)	81
第13表	A地点出土動物遺存体集計表(2)	82
第14表	B地点出土動物遺存体集計表	83
第15表	A・B地点出土糞石集計表	83
第16表	試料一覧及び ¹⁴ C年代	86
第17表	¹⁴ C年代と暦年較正年代	86
第18表	試料一覧及び ¹⁴ C年代	89
第19表	¹⁴ C年代と暦年較正年代	89
第20表	炭素(C)と窒素(N)含有表	89
第21表	A地点出土土器(口縁部)集計表	91
第22表	A地点出土土器(胴部)集計表	92
第23表	B地点出土土器(口縁部)集計表	93
第24表	B地点出土土器(胴部)集計表	94
第25表	A地点出土土器(底部)集計表	95
第26表	B地点出土土器(底部)集計表	95
第27表	A・B地点出土石器集計表	96

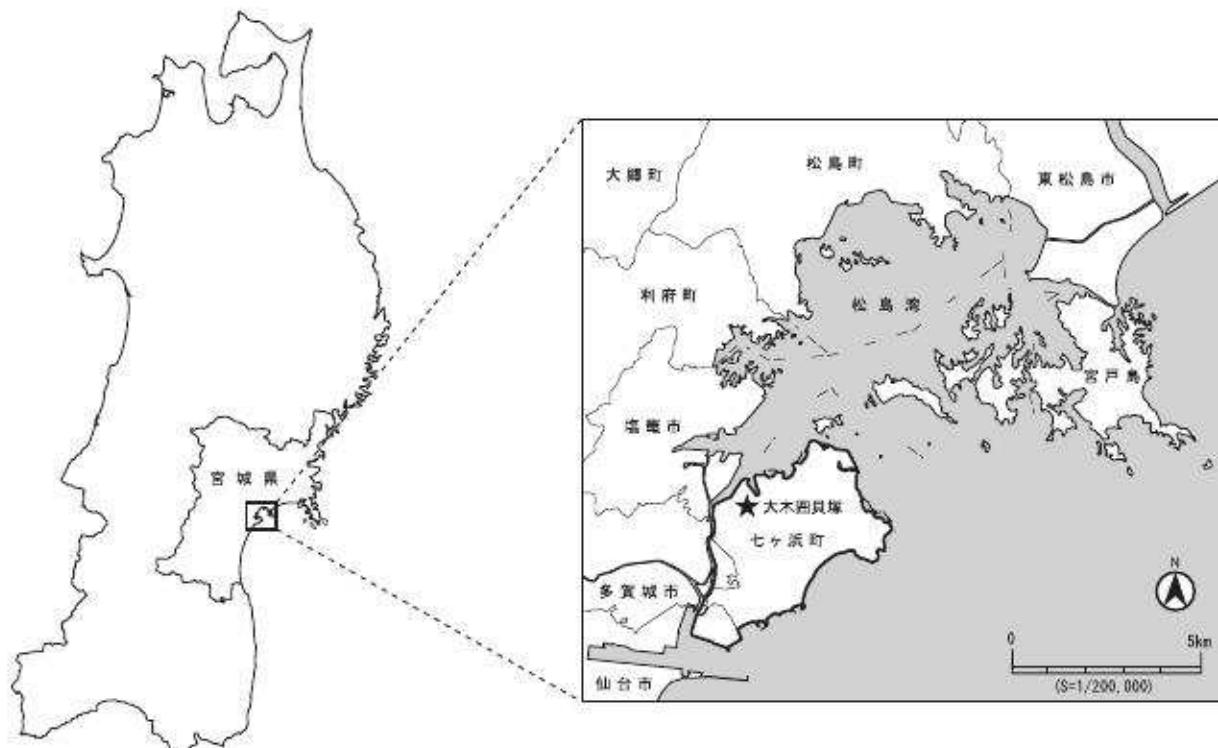
第1章 遺跡の概要と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

七ヶ浜町は、宮城県の中南部、松島湾の南側を画するように突き出た半島(七ヶ浜半島)に位置する(第1図)。町域は東西約9km、南北約4kmで、面積は13.27km²と東北地方で最も面積の小さい自治体である。町域の北側は松島湾、南・東側は太平洋にそれぞれ面しており、西側は仙台市、多賀城市、塩竈市と境を接している。古くから沿岸部の7つの地区(湊浜・松ヶ浜・菖蒲田浜・花渕浜・吉田浜・代ヶ崎浜・東宮浜)に集落が点在し、海苔養殖や近海漁業などの水産業が盛んで、北洋サケ・マス漁発祥の地として知られる。また、沿岸部の多くが特別名勝松島の指定地となっており、松島四大觀の多聞山をはじめ、多くの展望地から湾内に浮かぶ島々と松林が織りなす美しい景観を眺めることができる。

町の中央部には塩竈市及び多賀城市北部から連なる標高40~50mの定高性を示す丘陵が続いており、海岸付近の丘陵端部では比高20m程の急崖が確認される。丘陵裾部には浜堤及び後背湿地などの沖積低地が発達し、農地や宅地として利用されている。町域の西側には江戸時代の寛文~延宝年間に開削された貞山堀(御舟入堀)が南北に通っており、半島は陸地と分断されて島状を呈している。

大木圓貝塚は、宮城県宮城郡七ヶ浜町東宮浜字東大木・西大木・北下方・南下方地内に所在する。七ヶ浜町役場の西約1.5kmに位置し、塩釜湾に突き出た標高35~38mの舌状丘陵上に立地する縄文時代前期前葉から後期前葉の大規模な集落跡である。貝塚は台地縁辺部から斜面部にかけて、東西約260m、南北約125mの範囲に大小15の貝塚が分布している。その規模は東松島市里浜貝塚や松島町西の浜貝塚と並び、松島湾内でも有数の規模を誇る。丘陵裾部には沖積低地が広がり、当時は入江状を呈していたと考えられる。「大木」という地名の由来は、貝塚内に榎の大木があったことからと言



第1図 七ヶ浜町と大木圓貝塚の位置

われているが、残念ながらその木は現存しない。また、この一帯は縄文前期初頭から後期前葉まで拠点的な集落が点在しており、本貝塚の北東約0.5kmの丘陵緩斜面には縄文前期初頭の集落跡である左道貝塚が所在する。大木囲貝塚は昭和43(1968)年3月18日に国史跡の指定を受け、現在は指定地全域が史跡公園として整備、公開されている。昭和61(1986)年には隣接地に七ヶ浜町歴史資料館が開館し、出土資料の展示・収蔵を行っている。

本貝塚の調査・研究の歴史は古く、大正6(1917)年の松本彦七郎(東北帝国大学理学部)による調査を皮切りに、翌年の長谷部言人(東北帝国大学医学部)、昭和2~4(1927~29)年の山内清男(東北帝国大学医学部)、昭和24(1949)年に伊東信雄(東北大学文学部)などが調査を行っている(第2図、第1表)。特に、山内清男の調査では、のちに東北地方中・南部における縄文時代前期・中期の土器編年の基準となる土器が出土しており、近年、東北大学考古学陳列館所蔵の基準資料の一部が公開されている(早瀬ほか2006)。史跡指定後の昭和47~53(1972~1978)年には、町教育委員会による史跡範囲の公有地化、史跡公園整備のための発掘調査、貝層分布調査等が行われた。昭和61(1986)年8月には記録的な大雨(八・五豪雨)により西側斜面が大規模に崩落し、大木8b式を中心とする縄文中期の土器や大量の動物遺存体が出土し、改めて大木囲貝塚の遺物の豊富さと質の高さが明らかになった。

第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

七ヶ浜町における周知の遺跡は、縄文時代から中世まで49か所が知られ、これらは丘陵平坦部や緩斜面、海岸部の低地、砂浜、洞窟などに所在している(第3図、第2表)。以下、各時代・時期における七ヶ浜半島の様相を概観する。

縄文時代

宮城県は、全国有数の貝塚密集地域である。特に松島湾の沿岸部及び島嶼には、学史にも著名な貝塚が点在している。松島湾内に分布する貝塚は規模が大きく、多様かつ豊富な遺物を含むことから、大正時代から調査・研究が行われ、土器編年研究や貝塚研究の歴史も古い地域として知られている。

町内では草創期の遺跡は発見されていないが、早期の遺跡には吉田浜貝塚、前期~中期の遺跡には、東宮浜地区の大木囲貝塚、左道貝塚、花渕浜地区の藤ヶ沢貝塚、君ヶ岡貝塚、後期~晩期の遺跡には、東宮浜地区の東宮(鳳寿寺)貝塚、代ヶ崎浜地区の沢上貝塚、峯貝塚、吉田浜地区の二月田貝塚、沢尻貝塚、菖蒲田浜地区の阿川沼貝塚、諫訪神社前遺跡、松ヶ浜地区の林崎貝塚、笹山貝塚、汐見台地区の鬼ノ神山貝塚などがある。

吉田浜貝塚は、松島湾内で現存最古の貝塚として知られている。アサリ主体とカキ主体とする2つの貝層が検出され、早期中葉~後葉の貝殻文土器、条痕文土器が出土している(後藤1968)。左道貝塚では、アサリとカキを主体とする貝層、竪穴住居跡5棟、土壙墓1基などが発見され、前期初頭(上川名II式)の土器が出土している(七ヶ浜町教育委員会1991、後藤2005)。二月田貝塚では、アサリ主体の貝層、土壙墓1基、晩期後半(大洞A式期)の製塩遺構が検出され、多数の骨角器、口元に三角形の文様を持つ土偶などが出土している(後藤1970・1972)。鬼ノ神山貝塚では、晩期後半(大洞A式期)の製塩炉と考えられる焼櫟群が発見され、周辺から製塩土器片も多数出土している。

遺跡の立地を見ると、早期~中期の遺跡は標高30~40mの丘陵平坦部や緩斜面上に立地する傾向が強く、前期前半に成立する大木囲貝塚はこの典型的な例である。大木囲貝塚は後期前半まで七ヶ浜半島における拠点的集落として継続する。その後、後期~晩期には、標高5~20mの丘陵端部や海岸部の低地に立地する遺跡が目立ち、後期中葉以降は二月田貝塚が拠点的な集落として弥生時代まで継続する。こうした遺跡の立地の変化は、汀線の変化や製塩などの生産活動との関連が深いと考えら